

# SHOW-HHEYシネマルーム

★★★★

## 読まれなかった小説

2018年／トルコ・フランス・ドイツ・ブルガリア・マケドニア・ボスニア・スウェーデン・カタール映画  
配給：ピターズ・エンド／189分

2019（令和元）年12月13日鑑賞

シネ・リーブル梅田

### Data

監督・共同脚本・編集：ヌリ・ビルゲ・ジェイラン

出演：アイドゥン・ドウ・デミルコ  
ル／ムラト・ジェムジル／ペンヌ・ユルドゥルムラー／ハザール・エルグチュル／セルカン・ケスキン／タメル・レヴェント／アキン・アクス／オネル・エルカン／アフメト・ルファト・シュンガル／クビライ・トゥンチェル／カディル・チェルミク

## 👁️👁️ みどころ

トルコの巨匠ヌリ・ビルゲ・ジェイラン監督の『雪の轍』（14年）は、クソ難しい会話劇が延々と続く名作だったが、それは本作も同じ。作家を目指す主人公が展開する①同級生の女の子との会話劇、②有名な作家との会話劇を聞いていると、この男、性格に問題あり！そう思わざるをえないが・・・。

他方、一見善人に見える父親の方もバクチ好きの皮肉屋だから、アレ・・・。この父子の確執は一体どうなるの？

『読まれなかった小説』とは何とも不吉なタイトルだが、彼の処女作たる『野生の梨の木』の出版は？その販売は？そして、その読み手は？スクリーン上には父親の死、息子の死、さらに死体を這い回る蟻（？）等のシーンが登場するので、その虚実も含めてストーリー展開をしっかりと確認したい。

とっつきにくさでは超一流だが、胡波（フー・ポー）監督の234分の大作『象は静かに座っている』（18年）と同様、しっかりと鑑賞すれば間違いなくそれなりの価値あり！

—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————

## ■□■ 『雪の轍』もしんどかったが本作も！だが本作も必見！ ■□■

第67回カンヌ国際映画祭でパルム・ドール賞をしたのは、トルコの巨匠ヌリ・ビルゲ・ジェイラン監督による3時間16分の大作だった『雪の轍』（14年）。奇岩で有名なカッパドキアや洞窟ホテルを舞台とした、登場人物たちの1対1による複数の会話劇はクソ難しいテーマばかりだったが、一生懸命聞いているとその論点がよくわかってくるから、ぐったり疲れるものの、見応えも十分で、私は星5つをつけた（『シネマ36』124頁）。

『キネマ旬報』2019年12月上旬特別号は『読まれなかった小説』が描いたものと題する記事を載せているが、その冒頭には「彼の長篇8作目となる新作『読まれなかった小説』は、共同脚本を務めた若手作家アキン・アクスが書いたストーリーが元になっているものの、189分の長尺における文学的なセリフの応酬、ときに厳しくも美しい自然の描写、ざらついた人間関係といったこれまでと変わらぬジェイラン色に満ちた大作である。」「トロイ遺跡のあるチャナカレ県を舞台に、父と息子の対立が叙事詩的なスケールをもって描かれる。」と書かれている。たしかに、その通りだ。トルストイの『戦争と平和』は何度も映画化されているが、オードリー・ヘップバーンがナターシャ役で主演した『戦争と平和』(56年)では、メル・ファーラー扮するアンドレイ公爵とヘンリー・フォンダ扮するピエールが交わす哲学的な会話=人生論が1つの見どころだった。しかし、同作のそれは、アウステルリッツの戦いや、ボロディノの戦いを中心としたナポレオンとロシアとの戦争を描く壮大な歴史ドラマの1コマにすぎなかった。

それに対して、本作で後述のようにいくつか登場する「会話劇」はそれぞれ難解であるうえ、全編がその連続だから、疲れることおびたしい。そんなこともあって、新聞紙評における本作の評価は概ね高いものの、チェ・ブンブン氏の『読まれなかった小説』ヌリ・ビルゲ・ジェイランよ、美学を失った会話劇は拷問なのよ」の「小説と映画を履き違えた巨匠」とのネット記事では、「ジェイランよ・・・どうしてしまったのだ。絵画的なヴィジュアルから文学世界に観客を引き摺りこむ職人芸の重要な要素を抜いて描いたら、それはソースのかかっていないケバブだぞ。」とボロクソに書かれているので、そんな評価にも注目！

## ■□■大学を卒業して故郷へ。しかし俺の夢は？居場所は？■□■

本作は、大学を卒業した主人公のシナン(アイドゥン・ドウ・デミルコル)が故郷の田舎町チャンに戻ってくるシークエンスから始まる。日本なら22、3歳の年頃だが、アイドゥン・ドウ・デミルコルは1985年生まれだし、ひげ面のシナンの姿を見ると、とても22、3歳とは思えない。また、日本なら大学を卒業して故郷へ戻るのは、就職が決まり卒業式までゆっくり過ごせる3月の春休みのはずだが、さてシナンの場合は？

作家志望の彼は在学中に、既に処女作となる故郷を題材にした小説のようなエッセイのような本を完成させたというから立派なもの。彼の帰郷の目的の1つはその出版の実現にあるようだが、故郷に戻るや否や、父親の借金の催促をされたからアレレ・・・。小学校の教師をしているシナンの父親イドリス(ムラト・ジェムジル)は間もなく定年だが、根っからのギャンブル好きで、賭けの胴元の店に入りびたり、競馬に金をつぎこんでは負けて借金を重ねているらしい。そのことはシナンもうすうす知っていたが、母親のアスマン(ベンヌ・ユルドゥルムラー)は、父親が間もなくもらえるはずの退職金に手をつけなにかが心配らしい。そのため、シナンが久しぶりに実家に戻っても、妹を含めた4人家族は

かなりギスギスしていることが導入部からよくわかる。

もともと、イドリスは話し方も穏やかで若い頃は結構ハンサムな若者だったらしい。また、今でもギャンブル好きという欠点を除けば、アラブという名の猟犬を可愛がり、羊を育てているうえ、大地を緑化するという大きな夢の実現のため、村人から反対されてもバカにされても一人黙々と井戸を掘り続けているから、どうも彼は根っからの善人らしい。

しかし、そんな父親のいる故郷へ戻ってきたシナンは？その居場所は？

## ■□■饒舌がいい？寡黙がいい？234分の胡波作品と比較■□■

ジェイラン監督作品は、『雪の轍』も本作も難解なテーマを巡るセリフがメチャ多い会話劇であるうえ、3時間を超える長尺だから、ハッキリ言ってその鑑賞はしんどい。しかし、それ以上にしんどかったのが、作品完成直後に29歳で自殺してしまった中国の胡波（フー・ポー）監督の『象は静かに座っている』（18年）だった。これは、タイトルが意味深なら、4人の主人公たちが織りなす物語も抽象的かつ意味深。そして、234分という長尺の全編が会話劇だが、ジェイラン監督作品と違ってセリフの量が極端に少なく、ストーリーの展開を映像や登場人物の表情から読み取らなければならないから、もっとしんどい。更に、そのスクリーン全体が近時の邦画と正反対に常に暗いときているから、さらにしんどい。

会話劇でストーリーを進めていくについては、セリフをしゃべる俳優の力量が大切だが、それは本作も『象は静かに座っている』も大丈夫。また、テーマがいかにも難解でも、本作のように登場人物が饒舌にしゃべってくれば、ある程度は理解しやすい。そう考えると、どうせ難解な会話劇なら饒舌な方がいい！？いやいや、それでは深みに欠けるから、フー・ポー監督の『象は静かに座っている』のように、寡黙なしゃべりの中で論争のポイントだけを語らせ、後は観客の想像に委ねる方がいい！？それはきっとあなたの好みによるもので、どちらが正解というものではないだろうが、そんな視点から、本作と『象は静かに座っている』を対比してみるのも一興だ。

## ■□■主人公の女っ気は？紅一点との再会は？■□■

日本の男性作家を女っ気の関係で分類すれば、①三島由紀夫のように武術やボディビルに凝り、女っ気が全くないタイプ、②『火宅の人』の檀一雄や『墮落論』の坂口安吾に代表される、いわゆる「無頼派」で、女にだらしない(?)タイプ、そして③『人間失格 太宰治と3人の女たち』（19年）（『シネマ45』13頁）で見たように「死ぬ、死ぬ」と言いながら常に女関係が絶えなかった太宰治のようなタイプに分類できる。本作の主人公シナンは、そんな立派な作家には到底及ばない作家志望の若者にすぎないが、そんなシナンの本作最初の会話劇は、故郷に戻った時の高校の同級生の女性ハティジェ（ハザール・エルグチュル）との会話から始まる。

高校卒業後、大学に進学せず家の手伝いをしているハティジェからの「先生になるの？」との質問に対して、シナンは「教職に就くか、兵役に行くか・・・」と口ごもった後に、「この町には残らない。ここで腐りたくない」と答えたから、私を含めてこれを聞いた多くの観客は、「この男は何とデリカシーのない男だ」と感じたはず。だって、こんな言葉を聞けば、地元で腐っていくだけと言われたのも同然の女性ハティジェが傷つくことは明らかだ。

私も大学時代に、大阪から故郷の松山に戻った時、小学生の時の同級生の女の子に再会し、ときめきを感じたことがあるが、その気持ちはこの時のシナンも同じだったはず。したがって、そのシークエンスにも少し登場するような、ハティジェからのもう少し積極的なモーションがあれば、ひょっとして・・・？そんな期待もあったが、さてジェイラン監督が描く本作の女っ気は？

それをあえてバラしてしまえば、本作に登場するその後の会話劇のテーマは後述のとおり難解かつ哲学的なものばかりで、男女問題や恋愛に関するテーマは全く登場しない。その上、女っ気が登場するのもハティジェだけだし、そのハティジェもあっさり他の男と結婚してしまうからアレレ・・・。もっとも、本作中盤にはハティジェを巡って同級生の男ルザ（アフメト・ルフアト・シュンガル）とのトラブルが発生するから、それにも注目！

## ■■■難解な「論争」を1つずつ丁寧に！■■■

本作には難解な会話劇がいくつも登場する。しかし、その「論争」は丁寧に聞けば十分理解できるし、興味深い内容のものばかりだから、しっかりチャレンジしたい。まず最初の論争は、地元の本屋に一人座っていた著名な作家スレイマン（セルカン・ケスキ）とのもの。シナンは作家志望の若者にすぎないのだから、「これが僕の書いたはじめての作品です。時間がある時に読んでくれませんか？」と言えはいいのに、何じや、このシナンの態度は？あの手この手の議論をふっかけられ、いい加減うんざりしていたスレイマンが、最後にシナンから「僕の書いた原稿を読んでほしいんです」と言われても、「悪いが無理だ」と冷たく言い放ったのは当然。なぜ、シナンはスレイマンに対してこんな態度をとったの？また、この論争の是非は？

第2は、同じくシナンの処女作の出版とその費用めぐってのシナンとアドナン町長（カディル・チェルミク）との論争。そして第3も同じテーマでの、シナンと地元の採石工場経営者（クビライ・トゥンチェル）との論争。この両者を見ている（聞いていても）シナンの態度の悪さが目につくから、アレレ・・・。

さらに、本作後半の圧巻は、シナンが2人のイスラム教の指導者と歩きながら交わす論争だが、これはめちゃ難しい。しかし『戦争と平和』でアンドレイとピエールが歩きながら交わっていた哲学的論争と同じように聞き応えがあるので、しっかりと！

## ■■■父子の確執はここまで！その虚と実は？■■■

本作前半のシナンとハティジェとの論争、それに続くシナンとスレイマンとの論争を見ている（聞いている）と、シナンの性格の悪さ（？）が大きく目立ってくる。そして、それに反比例するかのように、父親イドリスの人の良さ（？）が目立つので、その時点でのこの父子の確執ぶりをみると、父親の方に軍配をあげたくなっていく。しかし、中盤からは、羊を育てたり、井戸を掘ったりする善行の一方で、博打にうつつをぬかしている姿や、教師の試験を受けに行く息子から小遣いをむしりとろうとする姿が登場してくるので、この父親もアレレという思いが強くなっていくから、結局どっちもどっち・・・？

父と子の確執を描いた名作は、『ハムレット』『リア王』等のシェイクスピアものを代表としてたくさんあるが、それをテーマにしたジェイラン監督の本作では、父親イドリスの死亡のシーンや、息子シナンの死亡のシーンが突如スクリーン上に登場してくるので、その虚と実に注目！

トルコにある世界遺産トロイ遺跡の近くの小さな町チャンを舞台にした本作には、「野生の梨の木」が登場する。シナンの処女作のタイトルも『野生の梨の木』だ。「野生の梨の木」は乾燥した土地で、水があまりなくても成長するらしい。そのため、手入れされないのんびりで甘い実がならないらしい。したがって、それは、そこで生きているにもかかわらず、人間には必要とされず、見向きもされない果物の木を表しているわけだ。しかし、そんな小難しいことはトルコ人には分かっても、日本人にはとてもとても理解できない。そう思いながら本作を観ていると、ある日、その「野生の梨の木」のそばで死亡したように横たわっている父親イドリスの姿が登場するので、ビックリ！

また、本作には一貫して井戸を掘り続けるイドリスの姿が登場する。ちなみに、呉天明（ウー・ティエン・ミン）監督の『古井戸』（87年）は、張芸謀（チャン・イーモウ）が主演した素晴らしい名作だったが、同作は最後まで「井戸は掘り当てられるのか？」がテーマだった（『シネマ 5』79頁）。しかし、本作では、意外にあっさり（？）イドリスが井戸掘りを諦めてしまうので、アレレ・・・。しかも、その直後にはいきなりその井戸の中でシナンが死亡しているシーンが登場するので、それにもビックリ！しかして、これらの各シーンの虚実は？

さらに、本作でいささか気味が悪いのは、死んでいるのか、それとも眠っているのかわからない赤ん坊の顔の上を、たくさんの蟻が這い回るシーン。このように、蟻をモチーフにしたシーンは、前述した、死んだように横たわるイドリスの顔の上をたくさんの蟻が這い回る形でも登場するが、これはハッキリ言って気持ちのいいシーンではない。しかして、それらの蟻が登場するシーンの持つ意味については、本作のパンフレットにある野谷文昭氏（東京大学名誉教授）の「蟻と再生」と題された「C r i t i c」で詳しく解説されているので、これは必読！

以上のように、本作では、シナンとイドリスの父子の確執が多く虚と実をもって描かれるとともに、蟻をモチーフにした寓話の中で描かれるので、その読み取り方に十分注意

する必要がある。

## ■□トルコの出版事情は？父子確執の再生は？■□

日本の出版事情の大変さは、45冊もの『シネマ本』を出版し続けている私が誰よりもよく知っている。しかし、トルコで1冊の本を出版するのがいかに大変かは、本作のシナンの姿を見ているとよくわかる。日本には自費出版のシステムがあるから、そこに依頼すれば、500部程度の自費出版はすぐにできるが、その費用はHow much？

それはともかく、本作がラストに近づく中、やっと『野生の梨の木』の出版を実現させたシナンが、それを持って帰宅する姿が描かれる。「最愛の母さんへ すべて母さんのおかげだ」とサインして、母親に献本したのはシナンの本心だろうが、そこでの母親の「お前はいつかやると思ってた」のセリフは、あまりにとってつけたような賛辞・・・？もともと、出版するのが大変なら、販売するのはもっと大変。しかして、『野生の梨の木』の売れ行きは？『読まれなかった小説』と題された本作のタイトルを見れば、その結論はおのずと明らかだが・・・。

そんな興味(?)の中、スクリーン上では突然シナンが兵役に就く姿が挿入されるので、またビックリ！そして、兵役を終えたシナンが再び帰郷すると、故郷はすっかり変わっており、今ではイドニスには家にほとんど帰らず、祖父の家に暮らしているらしい。そして、部屋の片隅に積み上げられた本の包みは湿ってカビが生えていたから、アレレ・・・。また、出版した本を置いてもらった書店にシナンが行ってみると、そこでは5カ月の間、1冊も売れないままだったようだから、さらにアレレ・・・。

そんな中、シナンはイドニスを訪ねて祖父の家に向かったが、そこで待ち受ける本作のクライマックスとは？そして、そこに登場する父子再生の姿とは？それは、あなた自身の目でしっかりと。

2019（令和元）年12月18日記